

除も選択肢に入ると考えられた。

4 食道癌 T1b ~ T3 症例に対する放射線化学療法 of 検討

秋山 修宏・本山 展隆・船越 和博
新井 太・稲吉 潤・加藤 俊幸
県立がんセンター新潟病院内科

T1b ~ T3 食道癌に対し行った放射線同時併用化学療法 (以下 CRT) の臨床経過を検討し、その有用性と問題点を検討した。当科で CRT を行った食道扁平上皮癌 T1b 症例 26 例, T2 症例 5 例, T3 症例 23 例を対象とした。CR 率は T1b : 88.5%, T2 : 80.0%, T3 : 47.8% であった。各群の再発率は T1b : 47.8%, T2 : 25.0%, T3 : 63.6% であった。各群の生存率は T1b : 2 年 87.2%, 3 年 62.2%, 5 年 49.8%, T2 : 1 年 75%, 5 年 75%, T3 : 1 年 64.3%, 2 年 30.9%, 5 年 30.9% であった。T1b 食道癌では CR に至っても再発を生じる症例が多く、追加化学療法や照射野の拡大、再発例に対する二次治療の確立が必要と思われた。T3 症例では CR 率も低く、再発が多く初期治療としては問題があると思われた。

5 TS-1 単剤による化学療法により pathological CR が得られた進行胃癌の 1 例

米山 靖・滝沢 一休・池田 晴夫
岩本 靖彦・相場 恒男・和栗 暢生
古川 浩一・五十嵐健太郎・月岡 恵
桑原 史郎*・片柳 憲雄*・斎藤 英樹*
橋立 英樹**

新潟市民病院消化器科
同 外科*
同 病理科**

症例は 61 歳, 男性。主訴は心窩部痛。既往歴に特記事項なし。現病歴, 2004 年 6 月初旬から心窩部痛出現。7 月 3 日近医にて上部消化管内視鏡検査, 胃吻門部直下小弯後壁に 2 型進行癌 (adenocarcinoma, por1) を指摘。手術目的に 7/14 当院外科紹介受診, 8/13 外科入院。しかし腹部 CT で腹

腔内に著明なリンパ節転移を認め、根治術は不可能との判断で、化学療法を目的に 8 月 17 日消化器科に転科となった。入院時現症・検査所見に異常なく、腫瘍マーカーも正常値以下であった。8 月 24 日から TS-1 120mg/day 内服による化学療法を開始, 3 コース行った。2 コース日途中の上部消化管内視鏡で、明らかな腫瘍縮小効果が確認され、同時期の腹部 CT で、リンパ節の縮小も確認された。3 コース終了後の上部消化管内視鏡では腫瘍部は S1 stage の潰瘍癬痕と化し、同部の生検で腫瘍細胞は認めず。同日の腹部 CT では、リンパ節の腫大は一部残るものの、治療前に比し明らかに縮小していることが確認された。これをもって手術可能と判断。2005 年 2 月 7 日当院外科にて脾・膣合併胃全摘術を施行。病理診断はリンパ節も含め、癌の遺残はなく、繊維化を認めるのみであった。現在まで、化療開始から約 14 ヶ月、手術から約 9 ヶ月無再発生存している。

6 高度進行胃癌に対する診断的腹腔鏡検査の意義

中川 悟・梨本 篤・藪崎 裕
県立がんセンター新潟病院外科

【目的】進行胃癌の治療方針決定における診断的腹腔鏡検査 (SL) の有用性を検討する。

【対象】SL を施行した cT3/4 胃癌 101 例を対象とした。

【方法】全麻下に Douglas 窩及び左横隔膜下より洗浄液を採取し Papanicolau 染色にて判定した。特に、1) SL と開腹所見の相関: SL 施行後直ちに開腹手術を施行した 38 例, 2) SL 所見による治療成績: ①術前 TS-1 + CDDP 療法を施行した 28 例と ② 4 型胃癌症例 52 例について検討する。

【結果】1) 腹膜転移 (P) と腹腔洗浄細胞診 (CY) の正診率はそれぞれ 89.5% と 81.8% であった。2) ①従来の検査では、Stage IV は 1 例であったが、SL を施行することにより POCY1 が 15 例存在し、Stage IV は 16 例となった。また、化療後の手術成績では、CY1 であった 15 例中 11 例で